

貨幣価値について

小 島 寛

目 次

はじめに

- (1) 購買手段価値
- (2) 支払手段価値
- (3) 兌換手段価値
- (4) 貸付手段価値
- (5) 準備手段価値
- (6) 蓄蔵手段価値
- (7) 手形債務価値 1 ——購買手段価値
- (8) 手形債務価値 2 ——支払手段価値
- (9) 手形債務価値 3 ——兌換手段価値
- (10) 手形債務価値 4 ——貸付手段価値
- (11) 手形債権価値
- (12) 銅貨債務価値
- (13) 銅貨債権価値
- (14) 結語

はじめに

私の貨幣論は、最初の購買論で購買手段・購買準備手段を規定し、続く信用論で支払手段・支払準備手段、兌換手段・兌換準備手段、貸付手段¹⁾・貸付準備手段を展開し、最後の蓄蔵論で蓄蔵手段を規定する²⁾。購買論、信用論、蓄蔵論の三部構成が採用されるわけであるが、本稿では行論上これを出動手段、準備手段、蓄蔵手段の三つに分類する。

出動手段は出動する貨幣の形態であり、購買手段、支払手段、兌換手段、貸付手段がこれに該当する。このうち、購買手段は、貨幣が商品購入に出動する形態であり、支払手段は、貨幣が債務支払いに出動する形態である。兌換手段は、貴金属貨幣(金貨)が卑金属貨幣(銅貨)の兌換請求にたいして出動する形態であり、貸付手段は、貨幣が貸付要求にたいして出動する形態である。このような相違はあるが、それらは、出動する貨幣であるという点で出

貨幣価値について

動手段として一括りにすることができる。この出動手段は、出動中の用途に限定されている点で不自由な貨幣である。

準備手段は出動に備えて用意される貨幣の形態である。これは購買準備手段、支払準備手段、兌換準備手段、貸付準備手段からなる³⁾。これらの手段は、一時的に転用可能であるが、基本的には、購買等、将来の用途のために使用を制限された、不自由な貨幣である。それに対して、蓄蔵手段は、現在も将来も使用を制限されることのない、自由な貨幣である⁴⁾。それは、蓄えることを自己目的として量的に無制限に追求される。

本稿は、以上の、現金貨幣の出動手段、準備手段、蓄蔵手段における価値を順次に考察し、最後に信用貨幣である手形と銅貨における価値を考察することを目的とする。

次節で、まず購買手段価値について考察することにする。

(1) 購買手段価値

貨幣論の最初に登場するのは購買手段であり、最初の出動手段である。前稿⁵⁾では、この購買手段の貨幣価値を単に貨幣価値と呼んでいたが、以後、購買手段価値と呼ぶことにする。前稿で述べたように、この購買手段価値には二つの因子が存在する。購買力と変態力である。

図1では、貨幣Gの購買手段価値における購買力は $G \rightarrow G$ で表示される。この購買力とは商品にたいする能動的交換力⁶⁾のことであり、貨幣が全ての商品所有者から交換を求められることを根拠に成立する能力である。それは外部の商品所有者にたいする能力である点で購買手段価値の対外的因子であり、また、商品の購買に出動する能力である点でその動力的因子となる。更に、この購買力は購買手段に固有の能力であるためにその価値の形態的因子となり、こうして購買手段価値は購買力をその対外的、動力的、形態的因子とするのである。

購買手段価値のもう一つの因子は変態力である。図1では、この変態力は $G-W$ で表示される。変態力とは、一般的には、ある姿態が他の姿態に変換する能力のことであり、購買手段価値においては、それは、特殊的に、貨幣姿態が商品姿態に変換する能力である。購買手段価値における変態力は、貨幣所有者の内部で作用する能力であるために対内的因子となり、対外的因子である購買力と対をなすことになる。

また、購買手段価値において変態力は、特殊的に、貨幣姿態が商品姿態へ変換する能力であり、この姿態が移り変わる点でその価値における遷移的因子となり、動力的因子である購買力と対をなす。更にまた、変態力は、一般的に、ある姿態が他の姿態に変換する能力とし

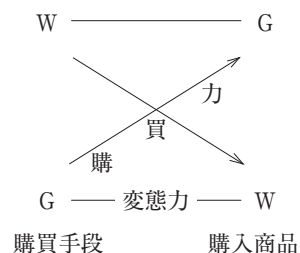


図 1

て価値の本質をなし、購買手段価値では、それは、特殊的に、貨幣姿態が商品姿態に変換する能力としてその価値の本質的因子となる。購買手段価値における変態力は本質的因子として形態的因子である購買力と対をなすのである。

この変態力は購買力の実現によって実現される。一般的に、変態力は遷移的因子であるために外部にたいして働きかけることはなく、ただ動力的因子の実現によってのみ、その所有者の内部で実現されるのである。また、遷移的因子である変態力は、一般的に、その実現によって動力的因子実現の成果を新たな姿態において具体化する。購買手段価値においては、変態力は、貨幣が商品へ姿態変換することによって、購買力実現の成果を商品姿態において具体化する。例えば、図 1 では、貨幣 G は商品 W の購買に出動することによってその購買力を実現するのであるが、その場合、変態力は、貨幣 G が商品 W へ姿態変換することによって、購買力実現の成果を商品 W の姿態において具体化するのである。

この購買手段価値は、場所、時、人が異なれば、同一商品の購入量を異にして実現される。ある量の貨幣によって購買できる同一商品の量が、場所、時、人において相違するわけである。それは、商品の需要量と供給量が場所によって相違し、時において変動するからであり、また人によってその予測が異なるからである。

こうして、購買手段価値は、購買力と変態力を互いに他を必要とする、分離不可能な二つの因子とし、前者をその対外的、動力的、形態的因子、後者をその対内的、遷移的、本質的因子とするのである⁷⁾。

次節では、支払手段価値について考察しよう。

(2) 支払手段価値

私の貨幣論では、後述する購買準備手段としての貨幣を基礎に信用売買が展開される。ここでは、手形によって商品が売買されるのであるが、手形期間後、債務者は満期手形にたいして貨幣を支払う。この債務履行機能を果たす貨幣が支払手段⁸⁾であり、購買手段に続く二番目の出動手段である。この支払手段としての貨幣の価値を支払手段価値と呼ぶことにするが、その二つの因子は弁済力と変態力である。

図 2 では、貨幣 G の支払手段価値における弁済力は $G \rightarrow G$ で表示される。それは債権債務消滅能力のことである。手形の満期後に支払手段が出動することによって、手形受取人において債権が消滅し、手形振出人において債務が消滅するわけである。この弁済力は、外部の債権者にたいする能力である点で支払手段価値の対外的因子となる。また、それは支払いに出動する能力であり、その点で支払手段価値の動力的因子となる。更

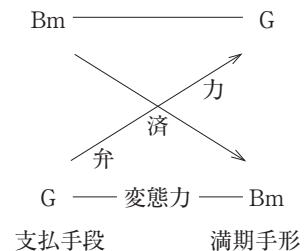


図 2

貨幣価値について

にまた、支払手段価値における弁済力は、支払手段に固有の能力であり、そのためにその形態的因子となる。

それについて、図2では、貨幣Gの支払手段価値における変態力はG—Bmで表示される。変態力とは、一般的には、ある姿態が他の姿態に変換する能力のことである。それは、支払手段価値においては、特殊的に、支払手段が満期手形へ姿態変換する能力となる。支払手段価値における変態力は、その貨幣所有者の内部で作用する能力であるためにその対内的因子となり、対外的因子である弁済力と対をなす。また、この変態力は、支払手段が満期手形へ姿態変換する点で支払手段価値における遷移的因子であり、動力的因子である弁済力と対をなす。更にまた、変態力は、一般的に、ある姿態が他の姿態に変換する能力として価値の本質をなすのであるが、それは、支払手段価値においては支払手段が満期手形へ姿態変換する能力として本質的因子となり、形態的因子である弁済力と対をなす。

この支払手段価値における変態力は弁済力の実現によって実現される。それは遷移的因子であり、外部にたいして働きかけることはない。そのために、動力的因子である弁済力の実現によってその所有者の内部で実現されるわけである。その点は、商品価値等、各形態の価値における変態力と変わりはない。また、一般的に、遷移的因子である変態力は、その実現によって、動力的因子実現の成果を新たな姿態において具体化する。支払手段価値における変態力も、支払手段が満期手形へ姿態変換することによって、弁済力実現の成果を満期手形の姿態において具体化するのである。

支払手段価値は場所、時、人に関わらず、同じ手形額で実現される。同一量の貨幣の支払いによって決済できる債務額は、場所、時、人によって変わらないわけである。これは、購買手段価値が場所、時、人によって異なる商品量において実現されることとは相違する。

こうして、支払手段価値は弁済力をその対外的、動力的、形態的因子とし、また変態力をその対内的、遷移的、本質的因子とするのである。

さて、この支払手段は、貨幣論の信用論で最初に展開される出動手段である。これが信用論で規定されるのは、信用売買を前提に機能する貨幣だからである。この信用論で次に展開される出動手段は兌換手段である。次節では、兌換手段価値について考察しよう。

(3) 兌換手段価値

前節までに述べた購買手段や支払手段は、全ての商品所有者から交換を求められる金を素材とした貨幣、金貨であるが、それだけでは商品売買に支障が生じる。金貨は、価値が大きいために多額取引には向いても少額取引には向かない。また商品売買には釣り銭の支払いが付きものである。そこでは、どうしても価値が小さく耐久性に優れた卑金属貨幣が必要となる。この貨幣は実質よりも大きい名目上の価値を有する記号貨幣である。これを銅貨で代表

させることにするが、この銅貨の発行には幾つか問題が生じる。

最初の問題は、銅貨を誰が発行するのかということである。経済原論では国家は捨象されているために、銅貨の発行は個別主体以外には存在しない。これを踏まえて結論をいえば、銅貨を発行する個別主体は金貨発行者である。商品論では、金商品所有者が金地金に加えて金貨を発行し、更に、貨幣論では、この金貨発行者が少額取引、釣り銭支払いを必要とする者に銅貨を発行するのである。例えば、金貨 1 枚との兌換約束を前提に銅貨 1000 枚が発行されるわけである。

次の問題は、金貨発行者が銅貨を発行する動機である。金貨発行者は銅貨 1000 枚の発行で金貨 1 枚を獲得するのであるが、彼は、例えば、この獲得した金貨 1 枚を兌換準備手段として更に 9000 枚の銅貨を発行し、金貨 9 枚を新たに獲得することができる。この 9 枚の金貨を金貨発行者は購買、支払い、兌換準備、貸付等、様々に利用できるのであるから、それが銅貨発行の動機となる。

更なる問題は、銅貨を受け取る者の動機である。銅貨を受け取った者は、それを少額取引や釣り銭支払いに利用することができる。それらは商品売買には不可欠の行為であり、そのために銅貨にたいする需要は必須のこととなる。銅貨によって、始めて少額取引、釣り銭支払いが実現されるわけである。この利点が銅貨受取の動機である。

最後の問題は銅貨を受け取る根拠である。銅貨を受け取る場合は三つある。一つ目は、受取手が金貨発行者から金貨と引き替えに銅貨を受け取る場合、二つ目は、商品の売り手が販売代価を銅貨で受け取る場合、三つ目は、商品の買い手が釣り銭を受け取る場合である。いずれの場合にも銅貨を受け取る根拠は共通であり、それは二つある。一つの根拠は、金貨発行者が銅貨 1000 枚を何時でも金貨 1 枚と兌換するという約束である。この約束は銅貨を受け取る直接的な前提であり、その意味で形式的根拠である。それにたいして、銅貨を受け取るもう一つの根拠は実質的な根拠である。それは金貨発行者の順調な活動であり、具体的にいえば、その継続的な金貨発行である。受取手は、この金貨所有者における兌換約束と継続的な金貨発行の二つを根拠として銅貨の兌換能力を信用し、それを受け取るのである。

こうして、銅貨を必要とする者は金貨発行者に金貨 1 枚を持参して銅貨 1000 枚を受け取り、銅貨を不要とする者は金貨発行者に銅貨 1000 枚を持参して金貨 1 枚を受け取ることになる。金貨発行者が銅貨と引き替えに金貨を引き渡すことが兌換であり、銅貨との引き替えに出動する金貨が兌換手段である。この手段は、銅貨の兌換請求にたいして出動する即時払いの支払手段であり、貨幣の三番目の出動手段である。それにたいして、銅貨は、金貨発行者の兌換能力を信用されて授受される信用貨幣である。

この兌換手段としての貨幣の価値を兌換手段価値と呼ぶことにする。その価値の二つの因子は兌換力と変態力である。図 3 では、貨幣 G の兌換手段価値における兌換力は $G \rightarrow G$ で表示される。この兌換力とは、一般的には記号貨幣にたいする、ここでは銅貨にたいする弁

貨幣価値について

済力のことである。この弁済力は、既述したように債権債務消滅能力であり、支払手段価値の形態的因子である。それが、この兌換手段価値では銅貨にたいする弁済力として兌換力になるわけである。この兌換力は、銅貨の兌換請求にたいする金貨の即時払いによって実現され、金貨発行者の債務と銅貨所有者の債権を同時に消滅するのである。

この兌換手段価値における兌換力は、外部の銅貨所有者にたいする能力であり、その点で兌換手段価値の対外的因子である。

また、それは、金貨が銅貨の兌換請求にたいして出動する点において兌換手段価値の動力的因子となる。更にまた、兌換力は兌換手段に固有の能力であるためにその形態的因子となる。

兌換手段価値のもう一つの因子は変態力である。図3では、この変態力はG—Ccで表示される。変態力とは、一般的には、ある姿態が他の姿態に変換する能力のことである。兌換手段価値においては、それは、特殊的に、金貨姿態が銅貨姿態に変換する能力であり、その金貨発行者の内部で作用する能力である。この点で、兌換手段価値における変態力はその対内的因子となり、対外的因子である兌換力と対をなすことになる。

また、この変態力は、金貨が銅貨へ姿態変換する点で兌換手段価値における遷移的因子であり、動力的因子である兌換力と対をなす。更にまた、兌換手段価値においては、兌換力が形態的因子であるのにたいして、変態力はその本質的因子となる。価値の本質は、一般的に、ある姿態が他の姿態に変換する能力、すなわち変態力であるが、それは兌換手段価値では本質的因子となり、形態的因子である兌換力と対をなすのである。

この兌換手段価値における変態力は兌換力の実現によって実現される。それは遷移的因子であり、外部にたいして働きかける動力的因子の実現によってのみ実現されるわけである。また、兌換手段価値の変態力は、金貨姿態が銅貨姿態へ変換することによって、兌換力実現の成果を銅貨姿態において具体化する。遷移的因子は、その実現によって動力的因子実現の成果を新たな姿態において具体化するわけである。

金貨1枚における兌換手段価値は、常に銅貨1000枚において実現される。その比率で兌換が約束されているからである。これは、金貨の購買手段価値の実現と相違する。購買手段価値は、一般的に、場所、時、人において異なる商品量で実現されるからである。

以上を要するに、兌換手段価値は兌換力と変態力を二つの因子とし、前者をその対外的、動力的、形態的因子、後者をその対内的、遷移的、本質的因子とするのである。

この兌換手段は貨幣論における信用論の二番目に展開される出動手段である。それが信用論に属するのは、金貨発行者の兌換能力にたいする信用を基礎にして授受される銅貨を前提に機能する貨幣だからである。この信用論で次に展開される出動手段は貸付手段である。次節では、この貸付手段の価値について考察しよう。

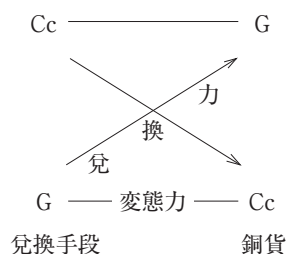


図 3

(4) 貸付手段価値

既述したように、支払手段、兌換手段は債務履行のために出動する貨幣であるが、後述するように、それらは出動するまでの間は支払準備手段、兌換準備手段として滞留する。この兌換準備手段に続いて展開されるのが貸付手段⁹⁾としての貨幣であり、それは購買手段、支払手段、兌換手段に続く四番目の出動手段である。貸付手段は利子の取得を目的として貸付に出動する貨幣であり、この利子は貨幣の期間使用にたいする代価である。

この貸付手段としての貨幣は購買準備手段、支払準備手段、兌換準備手段としての貨幣の一時的転用によって発生する¹⁰⁾。購買準備手段の所有者は、商品販売によって取得した手形の期間、この手段を一時的に転用することは既述したが、場合によっては、彼はそれを掛け売りにではなく貸付に一時的に転用することがあり、そのことによって、貸付手段としての貨幣が生まれるわけである。また、支払準備手段の所有者は、この手段を満期手形にたいする支払いのために留保するが、場合によっては、それを支払期限まで貸付に一時的に転用することがあり、そのことによって、貸付手段としての貨幣が発生するわけである。更にまた、兌換準備手段の所有者は、これを銅貨にたいする兌換出動のために留保するが、場合によっては、それを貸付に一時的に転用し、貸付手段として使用するわけである。

この貸付手段としての貨幣の価値を貸付手段価値と呼ぶことにすれば、その二つの因子は貸付力と変態力である。図4では、貨幣Gの貸付手段価値における貸付力はG→Gで表示される。この貸付力とは貨幣貸付債権形成能力のことである。この貸付債権は貸付元本と貸付利子にたいする満期時請求権のことであり、具体的には金銭消費貸借契約証書の姿を取る。この貸付元本と利子を満期時に取得できる関係を形成する能力が貸付力である。これは、外部の借り手にたいする能力であるから、貸付手段価値の対外的因子である。また、それは外部の借り手にたいして出動する能力である故に、貸付手段価値の動力的因子である。更に、この貸付力は、貸付手段としての貨幣に固有の能力であるために、貸付手段価値の形態的因子となる。

これにたいして、貸付手段価値におけるもう一つの因子は変態力であり、図4では、貨幣Gの貸付手段価値における変態力はG—Clで表示される。変態力は、一般的には、ある姿態が他の姿態に変換する能力のことであり、貸付手段価値においては、特殊的に、貸付貨幣が貸付債権へ姿態変換する能力である。それは、貨幣所有者の内部で作用する能力であることによって、貸付手段価値の対内的因子となり、対外的因子である貸付力と対をなす。

また、この変態力は、貸付貨幣が貸付債権へ姿態変換する点において貸付手段価値の遷移

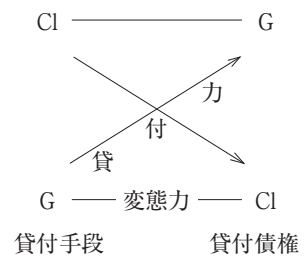


図 4

貨幣価値について

的因子となり、その動力的因子である貸付力と対をなす。更にまた、変態力は、一般的に、ある姿態が他の姿態に変換する能力として価値の本質をなすが、それは貸付手段価値において本質的因子となり、形態的因子である貸付力と対をなすのである。

貸付手段価値における変態力は貸付力の実現によって実現される。この変態力は遷移的因子であり、貸付力は動力的因子である。前者は後者の実現によって実現されるのであり、その点は、商品価値等における遷移的因子と同じである。また、貸付手段価値における変態力は、貸付貨幣が貸付債権へ姿態変換することによって、貸付力実現の成果を貸付債権の姿態において具体化する。例えば、年利利率10パーセントで100万円の貨幣が一年間貸し付けられた場合、その変態力は、100万円の貸付貨幣から満期時110万円の貸付債権へ姿態変換することによって、貸付力実現の成果を一年後110万円の貸付債権の姿態において具体化するのである。

この貸付手段価値は、場所、時、人によって、その大きさを異にして実現される。同一額の貨幣貸付によって獲得できる満期時貸付債権額が、場所、時、人によって相違するからである。それは、同一期間貸付利子額が貸付毎に異なることによる。この貸付手段価値は、場所、時、人によって実現の大きさを異にする点で購買手段価値と同じであり、それらに関わらず同じ大ききで実現される支払手段価値、兌換手段価値と相違する。

こうして、貸付手段価値は貸付力をその対外的、動力的、形態的因子とし、また変態力をその対内的、遷移的、本質的因子とするのである。

さて、貸付手段は、貨幣論の信用論においては支払手段、兌換手段に継いで展開される三番目の出動手段である。これがその信用論で規定されるのは、借り手の返済能力にたいする信用を前提に機能する貨幣であるからである。また、この貸付手段は購買手段、支払手段、兌換手段に継ぐ出動手段の四番目、その最後の機能形態である。この出動手段とは異なる機能形態の一つは準備手段であるが、次節では、この準備手段価値について考察しよう。

(5) 準備手段価値

上述したように、出動手段は出動する貨幣の形態であり、購買手段、支払手段、兌換手段、貸付手段からなる。それにたいして、準備手段は、貨幣が出動手段に転換するまでの準備の形態であり、購買準備手段、支払準備手段、兌換準備手段、貸付準備手段からなる。これらの手段は、出動手段になるまでの間、その所有者の手元に留保される。したがって、準備手段は、一時的に転用可能ではあるが、将来の用途のために使用を制限された、不自由な貨幣である。

これらの準備手段の貨幣価値、すなわち準備手段価値とは如何なるものであろうか。それは転換力と変態力からなる二つの因子によって構成される。

図5では、貨幣Gの準備手段価値における転換力は $G \rightarrow G$ で表示される。この転換力とは、一般的には準備手段が出動手段に転換する能力である。特殊的には、例えば、購買準備手段は、商品取得が必要になると購買手段に転換する貨幣であり、その価値は購買手段に転換する能力、すなわち転換力をその一因子として有するわけである。これは購買準備手段を購買手段に転換させるという貨幣所有者の意思と行動の結果である。そうした意思と行動が購買準備手段に転換力という能力を与えるのである。それは、貨幣所有者の債務支払いの意思と行動が支払手段に弁済力という能力を与えるのと同じである。

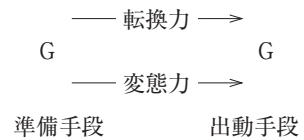


図 5

この購買準備手段のほかに、支払準備手段は債務が満期になると支払手段に転換するのであり、この支払手段に転換する能力、すなわち転換力をその価値の一因子とする。また、兌換準備手段は銅貨の兌換請求があると兌換手段に転換し、この兌換手段に転換する能力、すなわち転換力をその価値の一因子とする。更にまた、貸付準備手段も、貸付先があれば貸付手段に転換し、この貸付手段に転換する能力、すなわち転換力をその価値の一因子とするのである。

この転換力にたいして、準備手段価値のもう一つの因子は変態力である。図5では、貨幣Gの準備手段価値における変態力は $G \rightarrow G$ で表示される。変態力は、一般的には、ある姿態が他の姿態に変換する能力のことであるが、準備手段価値においては、特殊に、準備手段が出動手段へ姿態変換する能力である。例えば、購買準備手段価値における変態力は、購買準備手段が購買手段へ姿態変換する能力である。また、それは、支払準備手段価値では、支払準備手段が支払手段へ、兌換準備手段価値では、兌換準備手段が兌換手段へ、貸付準備手段価値では、貸付準備手段が貸付手段へ姿態変換する能力である。準備手段の出動手段への姿態変換において、これら二つの貨幣は外形的に変わりはないが、前者は出動の準備形態、後者は出動の形態にあり、両者はその機能を異にするわけである。

このように、準備手段価値において転換力と変態力は二つの因子を構成するが、転換力は準備手段に固有の能力であり、その点で準備手段価値の形態的因子となる。それにたいして、変態力は、一般的には、ある姿態から他の姿態へ変換する能力として価値の本質をなすが、それは、準備手段価値においては、準備手段から出動手段へ姿態変換する能力としてその本質的因子となり、形態的因子である転換力と対をなす。

また、準備手段価値において転換力はその動力的因子であり、変態力はその遷移的因子である。転換力は出動手段へ転換する動力であり、その点で準備手段価値の動力的因子である。それにたいして、変態力は、準備手段が出動手段へ姿態変換する点で、その移り変わる因子、すなわち遷移的因子となり、動力的因子である転換力と対をなす。

ところで、既述したように、出動手段価値においては、形態的因子は動力的因子であると

貨幣価値について

ともに対外的因子でもあり、また本質的因子は、遷移的因子であるとともに対内的因子でもあった。例えば、購買手段価値では、購買力は、購買手段に固有の能力である点でその形態的因子であり、商品の購買に出勤する点でその動力的因子であり、外部の商品にたいする能力である点でその対外的因子であった。また、その変態力は、貨幣姿態が商品姿態に変換する能力として本質的因子であるとともに、この姿態が移り変わる点で遷移的因子であり、貨幣所有者の内部で作用する点でその対内的因子であった。

それについて、準備手段価値においては、転換力は形態的因子であるとともに動力的因子であり、変態力は本質的因子であるとともに遷移的因子であることは既に述べたが、対外的因子と対内的因子の規定はどうであろうか。結論をいうと、対外的因子という規定は、出動手段価値においては存在するが、準備手段価値においては存在しないのであり、別のいい方をすれば、準備手段価値における転換力と変態力は、ともにその対内的因子となる。何故ならば、この二つの因子は準備手段所有者のみに関わる能力であり、その内部で作用する能力であって、そのために両者とも準備手段価値の対内的因子となるからである。転換力も変態力も外部に働きかける能力ではないのであり、したがって対外的因子とはならないわけである。それ故に、図5において、貨幣Gの準備手段価値の転換力 $G \rightarrow G$ と変態力 $G \leftarrow G$ は同じ方向で表示されている。

例えば、購買準備手段価値では、転換力は、購買手段に転換する点で購買準備手段に固有の形態的因子であり、またその動力的因子であるが、その所有者の内部で作用する能力である点でその対内的因子となる。他方、その変態力は、購買準備手段が購買手段に姿態変換する能力として本質的因子であり、またこの姿態が移り変わる点で遷移的因子であるとともに、貨幣所有者の内部で作用する点でその対内的因子となる。準備手段価値における転換力と変態力は、両方ともその対内的因子となるわけである。

この準備手段価値においても、出動手段価値と同様に、遷移的因子である変態力は動力的因子である転換力の実現によって実現される。例えば、支払準備手段は、債務履行のために支払手段に転換することによって転換力を実現する。この実現によって支払準備手段は支払手段に姿態変換し、変態力を実現されるのである。動力的因子である転換力の実現によって遷移的因子である変態力は実現されるわけである。

また、準備手段価値における変態力は、準備手段が出動手段へ姿態変換することによって、転換力実現の成果を出動手段の姿態において具体化する。例えば、貸付準備手段価値においては、転換力の実現の成果は、貸付準備手段が貸付手段に姿態変換することによって生ずる新たな姿態、貸付手段の姿態において具体化されるのである。

こうして、準備手段価値は転換力をその動力的、形態的因子とし、また変態力をその遷移的、本質的因子とするともに、この両者を対内的因子とするのである。

次節では、蓄蔵手段価値について考察しよう。

(6) 蓄蔵手段価値

既述したように、準備手段には購買準備手段、支払準備手段、兌換準備手段、貸付準備手段があり、それらは、出動手段に転換するまで留保される貨幣であった。この準備手段は、一時的に転用されることは可能であるが、将来の用途によって使用を制限される不自由な貨幣である。例えば、購買準備手段は、購買手段に転換するまで、基本的にその使用を制限される貨幣である。

それにたいして、蓄蔵手段は、質的には、現在も将来も用途を制限されない、自由な貨幣であり、量的には、蓄えることを自己目的として無制限に蓄えられる貨幣である。この蓄蔵手段の貨幣価値を蓄蔵手段価値と呼ぶことにするが、その二つの因子は展開力と変態力である。

図6では、貨幣Gの蓄蔵手段価値における展開力は $G \rightarrow G$ で表示される。この展開力とは、蓄蔵手段が他の手段へと展開する能力である。詳しくいえば、この展開力の一つは、蓄蔵手段が出動手段へ展開する能力である。この出動手段は購買手段、支払手段、兌換手段、貸付手段からなり、蓄蔵手段は、必要があれば、これらの手段に自由に展開できるわけである。もう一つは、蓄蔵手段から準備手段へ展開する能力である。この準備手段は、購買準備手段、支払準備手段、兌換準備手段、貸付準備手段からなり、蓄蔵手段は、必要に応じて、これらの手段に自由に展開することができる。蓄蔵手段は自由な貨幣として何時でも利用できる故に、その価値における展開力は随意的な能力として存在するのである。

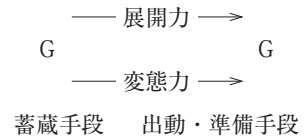


図 6

この展開力は、その貨幣所有者のみに関わる能力であり、その内部で作用する能力である点で、蓄蔵手段価値の対内的因子である。また、これは、出動手段、準備手段へ展開する能力であり、その点で蓄蔵手段価値の動力的因子である。蓄蔵手段としての貨幣は、必要に応じて、随時、希望する手段に展開できるわけである。更に、この展開力は、蓄蔵手段としての貨幣に固有の能力であるため、蓄蔵手段価値の形態的因子である。こうして、展開力は、蓄蔵手段価値における対内的因子、動力的因子、形態的因子となる。

蓄蔵手段価値における他の一つの因子は変態力である。図6では、貨幣Gの蓄蔵手段価値における変態力は $G-G$ で表示される。変態力は、一般的には、ある姿態が他の姿態に変換する能力であり、蓄蔵手段価値においては、特殊的に、蓄蔵手段が出動手段や準備手段へ姿態変換する能力となる。この変態力は、貨幣所有者の内部で作用する能力である点で、蓄蔵手段価値の対内的因子であり、同じ対内的因子である展開力と対をなす。また、蓄蔵手段価値における変態力は、蓄蔵手段が出動手段や準備手段へ姿態変換する点で、その移り変わ

貨幣価値について

る因子，すなわち遷移的因子となり，動力的因子である展開力と対をなす。更にまた，変態力は，一般的に，ある姿態が他の姿態に変換する能力として価値の本質をなすが，それは，蓄蔵手段価値においては，蓄蔵手段が出動手段や準備手段へ姿態変換する能力としてその本質的因子となり，形態的因子である展開力と対をなすのである。

蓄蔵手段価値において，変態力は展開力の実現によってその所有者の内部で実現される。遷移的因子が動力的因子の実現によって実現されるわけである。また，蓄蔵手段価値における変態力は，その実現によって展開力の実現の成果を新たな姿態において具体化する。例えば，その変態力は，蓄蔵手段が購買手段へ姿態変換することによって，展開力の実現の成果を購買手段の姿態において具体化するのである。

こうして，蓄蔵手段価値は展開力をその対内的，動力的，形態的因子とし，また変態力をその対内的，遷移的，本質的因子とするのである。

次の五節では，手形価値について考察しよう。

(7) 手形債務価値 1 ——購買手段価値

貨幣は出動手段，準備手段，蓄蔵手段の三つに分かれる。出動手段は，出動する貨幣の形態である。購買手段，支払手段，兌換手段，貸付手段がこれに該当する。準備手段は，貨幣が出動手段となるまでの準備の形態である。購買準備手段，支払準備手段，兌換準備手段，貸付準備手段がこれに当たる。最後の蓄蔵手段は，蓄えることを自己目的とする，用途を限定されない自由な貨幣である。これらの手段における価値については現金貨幣，すなわち金貨を前提に述べてきた。手形価値の場合はどうであろうか。

手形も貨幣として機能する。現金貨幣にたいする信用貨幣である。この手形には為替手形と約束手形がある。振出人の立場からみると，約束手形は純然たる債務証書であり，為替手形は，一方で支払引受人にたいして債権証書であるが，他方で手形受取人にたいしては債務証書である。いずれにしろ，振出人にとって，約束手形も為替手形も受取人にたいして債務証書であり，その振出手形価値は手形債務の価値，約めていえば手形債務価値となる。以下の四節では，この手形債務価値について考察しよう。

まず，為替手形が購買手段として機能する場合からみてみよう。例えば，DはEに商品 W_d を販売し，Eの支払引受を基礎に為替手形を振り出してFから商品 W_f を購入するとしよう。Eは商品 W_d の買い手であり，為替手形の支払引受人である。Dは，一方で商品 W_d の売り手，他方で商品 W_f の買い手であり，その手形の振出人である。Fは商品 W_f の売り手であり，その手形の受取人である。この場合，振出人Dは為替手形を購買手段として使用し商品 W_f を購入しているのであるから，この為替手形は購買手段価値を有している。一般的に，振出人にとって為替手形は手形受取人にたいする債務証書であるから，その手形価

値は手形債務価値であるが、ここでは振出人 D にとってその手形債務価値は購買手段価値になるわけである。

次に、約束手形が購買手段として機能する場合である。例えば、買い手 P は約束手形を振り出して売り手 Q から商品 W_q を購入したとしよう。この場合も、振出人 P は約束手形を購買手段として使用し商品 W_q を購入しているのであるから、この手形債務価値も購買手段価値になる。

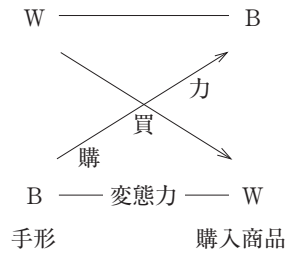


図 7

これらの手形、すなわち為替手形と約束手形における購買手段価値の因子は、購買力と変態力である。図7では、手形 B の購買手段価値における購買力は B → B で表示される。この購買力は商品を購入する能力であるが、それは現金貨幣の購買力と異なる。後者が現金貨幣の出動による無条件の購買能力であるのにたいして、前者は手形受取人の与信を条件とする購買能力だからである。

こうした相違はあるが、手形の購買手段価値における購買力も、現金貨幣におけるそれと同様に、外部の売り手にたいする能力であるために、その対外的因子となる。また、それは購買出動する能力であるために、手形の購買手段価値の動力的因子となる。更にまた、この購買力は、購買手段としての振出手形に固有の能力である点で、手形の購買手段価値の形態的因子となる。

他方、手形の購買手段価値におけるもう一つの因子は変態力である。図7では、この変態力は B—W で表示される。それは、手形が購入商品へ姿態変換する能力である。この変態力は、手形振出人の内部で作用する能力であり、そのために手形の購買手段価値の対内的因子となり、対外的因子である購買力と対をなす。また、この変態力は、手形が購入商品へ姿態変換する点で、その移り変わる因子、すなわち遷移的因子であり、動力的因子である購買力と対をなす。更にまた、変態力は、一般的に、ある姿態が他の姿態に変換する能力として価値の本質をなすが、それは、手形の購買手段価値においてはその本質的因子となり、形態的因子である購買力と対をなす。

手形の購買手段価値において変態力は、購買力の実現によってその所有者の内部で実現される。具体的には、手形の購買出動が購買力を実現し、そのことによって変態力が実現されるわけである。また、この変態力が実現されることによって、購買力の実現の成果は購入商品の姿態において具体化される。

こうして、手形の購買手段価値は購買力をその対外的、動力的、形態的因子とし、また変態力をその対内的、遷移的、本質的因子とするのである。

以上は、手形が購買手段として機能する場合であるが、このほかに、振出人は為替手形や約束手形を支払手段として利用することがある。

(8) 手形債務価値 2 —— 支払手段価値

振り出した手形で満期手形債務にたいして支払う場合、手形は支払手段として機能する。この手形の債務価値は支払手段価値となるのであり、その価値は弁済力と変態力を二つの因子とする。

図8では、手形Bの支払手段価値における弁済力は $B \rightarrow B$ で表示される。この弁済力とは債務履行によって債権を消滅する能力であるが、これは現金貨幣における支払手段価値の弁済力と異なる。後者の弁済力は、現金貨幣が支払いに出勤することによって無条件に債務を履行する能力であり、したがってまた、いわば完全な債権消滅能力である。それにたいして、前者の弁済力は、手形受取人の与信を条件とする債務履行能力であり、したがってまた、満期債務を新たな手形債務で置き換える、いわば不完全な債権消滅能力である。

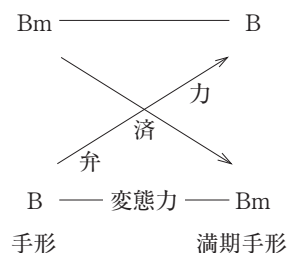


図 8

手形の支払手段価値における弁済力は、外部の債権者にたいする能力であるために、その対外的因子となる。また、それは外部の債権者に働きかける能力であるために、手形の支払手段価値の動力的因子となる。その働きかけは手形の支払出勤によって行われる。更に、この弁済力は、支払手段としての振出手形に固有の能力である点で、その支払手段価値の形態的因子となる。

他方、振出手形の支払手段価値におけるもう一つの因子は変態力である。図8では、この変態力は $B-Bm$ で表示される。これは、手形が満期手形へ姿態変換する能力である。この変態力は、手形振出人の内部で作用する能力であるために手形の支払手段価値の対内的因子となり、対外的因子である弁済力と対をなす。また、この変態力は、手形が満期手形へ姿態変換する点で、その移り変わる因子、すなわち遷移的因子である。それは動力的因子である弁済力と対をなすことになる。更にまた、変態力は一般的に価値の本質であるが、それは、手形の支払手段価値においてはその本質的因子となり、形態的因子である弁済力と対をなすのである。

手形の支払手段価値において変態力は、弁済力の実現によってその所有者の内部で実現される。具体的には、手形の支払出勤が弁済力を実現し、そのことによって変態力が実現されるわけである。また、この変態力が実現されることによって、弁済力の実現の成果は満期手形の姿態において具体化される。

こうして、手形の支払手段価値は弁済力をその対外的、動力的、形態的因子とし、また変態力をその対内的、遷移的、本質的因子とするのである。

以上は、手形が支払手段として機能する場合である。次節では、為替手形や約束手形が兌換手段として利用される場合を考察しよう。

(9) 手形債務価値 3 —— 兌換手段価値

既述したように、金貨発行者は金貨 1 枚と引き替えに銅貨 1000 枚を発行し、銅貨受取人はそれを少額取引や釣り銭に利用した後、余分な銅貨を金貨にたいして兌換請求するが、場合によっては、金貨ではなく金貨発行者を振出人とする為替手形や約束手形での支払いを求める。例えば、J は甲地で 10 万枚の銅貨を 100 枚の金貨に兌換して、それを乙地に送らなければならない場合、その運搬は危険であり、手間がかかる。そこで、J は 100 枚の金貨の代わりに甲地の金貨発行者を振出人、その乙地支店を支払人とする為替手形、あるいは甲地の金貨発行者を振出人とする約束手形を兌換によって受け取り運搬して利用するわけである。それらの手形は一覧払いのものも期限後払いのものもあるが、安全を重視すれば後者が選択されるであろう。

この兌換手段として機能する手形の債務価値は兌換手段価値であるが、この価値の二つの因子は兌換力と変態力である。図 9 では、手形 B の兌換手段価値における兌換力は B → B で表示される。この兌換力とは、銅貨にたいする弁済力であり、債権債務消滅能力である。しかし、これは金貨における兌換手段価値の弁済力と異なる。後者の兌換力は、金貨の出動によって無条件に兌換債務を履行する能力であるのにたいして、前者の兌換力は、手形受取人の与信を条件とする債務履行能力であり、銅貨債務を手形債務で置き換える能力である。

この兌換力は、外部の銅貨所有者にたいする能力であるためにその対外的因子であり、また、外部の銅貨所有者にたいして出動する能力であるために手形の兌換手段価値の動力的因子である。更に、この兌換力は兌換手段としての振出手形に固有の能力であるためにその兌換手段価値の形態的因子となる。

振出手形の兌換手段価値におけるもう一つの因子、変態力は、図 9 では、B—Cc で表示される。この変態力は手形が銅貨へ姿態変換する能力である。これは、手形振出人の内部で作用する能力である点で手形の兌換手段価値の対内的因子であり、対外的因子である兌換力と対をなす。また、この変態力は、手形が銅貨へ姿態変換する遷移的因子であり、動力的因子である兌換力と対をなす。更にまた、変態力は、一般的に、ある姿態が他の姿態に変換する能力であり、その点で価値の本質をなすが、それは、手形の兌換手段価値においては、手形が銅貨に姿態変換する能力としてその本質的因子となり、形態的因子である兌換力と対を

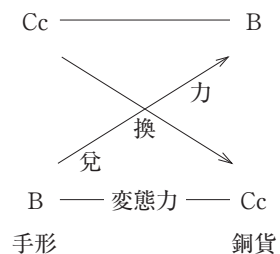


図 9

貨幣価値について

なす。

手形の兌換手段価値における変態力は、兌換力の実現によってその所有者の内部で実現される。手形の兌換出動が兌換力を実現することによって、変態力が実現されるわけである。また、この変態力の実現によって、兌換力実現の成果は銅貨姿態において具体化される。

こうして、手形の兌換手段価値は兌換力をその対外的、動力的、形態的因子とし、また変態力をその対内的、遷移的、本質的因子とするのである。

以上は、手形が兌換手段として機能する場合であるが、次節では、為替手形や約束手形が貸付手段として機能する場合を考察しよう。

(10) 手形債務価値 4 —— 貸付手段価値

振出人が手形で貸し付ける場合、その手形は貸付手段として機能するのであり、この手形の債務価値は貸付手段価値となる。この価値の二つの因子は貸付力と変態力である。図 10 では、手形 B の貸付手段価値における貸付力は B→B で表示される。手形の貸付手段価値における貸付力とは貸付債権形成能力のことである。これは現金貨幣における貸付手段価値の貸付力と異なる。後者の貸付力は、現金貨幣の貸付出動による無条件の貸付債権形成能力である。それにたいして、前者の貸付力は、手形受取人の与信を条件とする貸付債権形成能力である。

手形の貸付手段価値における貸付力は、外部の借り手になりたい能力であるためにその対外的因子となる。また、それは、外部の借り手になりたいして出動する能力であるためにその貸付手段価値の動力的因子となる。更に、この貸付力は、貸付手段としての振出手形に固有の能力であるためにその貸付手段価値の形態的因子となる。

他方、手形の貸付手段価値における変態力は、図 10 では、B—CI で表示される。この変態力は、手形が貸付債権へ姿態変換する能力である。それは手形振出人の内部で作用する能力であり、手形の貸付手段価値の対内的因子として、対外的因子である貸付力と対をなす。また、この変態力は、手形が貸付債権へ姿態変換する遷移的因子として、動力的因子である貸付力と対をなすのであり、更に、それは手形の貸付手段価値の本質的因子として、形態的因子である貸付力と対をなすのである。

この変態力は貸付力の実現によってその所有者の内部で実現されるのであり、それは、手形が貸付に出動することによって行われる。また、手形の貸付手段価値における変態力は、その実現によって貸付力の実現の成果を貸付債権の姿態において具体化する。

こうして、手形の貸付手段価値は貸付力をその対外的、動力的、形態的因子とし、また変

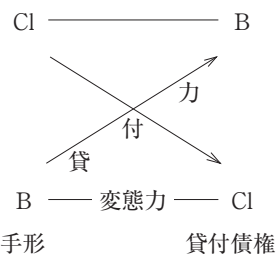


図 10

態力をその対内的、遷移的、本質的因子とするのである。

以上の四節を要するに、為替手形と約束手形は振出人において購買手段、支払手段、兌換手段、貸付手段として機能するのであり、それらの手形債務価値は購買手段価値、支払手段価値、兌換手段価値、貸付手段価値として存在するのである¹¹⁾。

さて、第7節からこの第10節まで、振出人における手形債務価値について考察した。次節では、受取人における手形債権価値について考察しよう。

(11) 手形債権価値

第7節で、DはEに商品Wdを販売し、Eの支払引受を基礎に為替手形を振り出してFから商品Wfを購入する、という例を掲げた。この手形は、受取人Fにとっては、支払引受人Eと振出人Dにたいする債権となる。受け取った手形は、満期前であれば将来の貨幣請求権として、満期後であれば即時払いの貨幣請求権として機能する。為替手形価値は受取人においては手形債権の価値、約めていえば手形債権価値となる。

また同節で、Pが約束手形を振り出してQから商品を購入する例を掲げたが、この場合も、受取人Qにおいて、約束手形は振出人Pにたいする債権として機能する。約束手形価値も受取人においては手形債権価値となる。

更にまた第8節から第10節まで、為替手形と約束手形が、支払手段、兌換手段、貸付手段として機能することを説明したが、それらの手形も、受取人においては債権として機能するのであり、その受取手形価値も手形債権価値となる。

要するに、手形価値は受取人においては手形債権価値となるのであるが、これにも二つの因子が存在する。一つは換金力であり、もう一つは変態力である。

図11では、満期手形Bmの債権価値における換金力はBm→Bmで表示される。この換金力は返済貨幣取得能力である。それは、満期前の手形債権価値では将来の換金力であり、満期後では即時払いの換金力である。それは外部の手形支払人にたいする能力であり、そのために手形債権価値の対外的因子となる。また、それは外部の手形支払人にたいして出動する能力であるために、手形債権価値の動力的因子となる。更に、この換金力は、受取手形に固有の能力である点で、手形債権価値の形態的因子となる。

それにたいして、手形債権価値における変態力は、図11では、Bm—Gで表示される。変態力は、一般的には、ある姿態が他の姿態に変換する能力であるが、手形債権価値においては、特殊的に、受取手形が返済貨幣に姿態変換する能力である。それは、満期前では、受取手形が将来の返済貨幣に姿態変換す

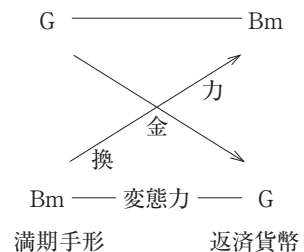


図 11

貨幣価値について

る能力であり、満期後では、満期受取手形が返済貨幣に姿態変換する能力である。いずれも、その手形所有者の内部で作用する能力である。このために、手形債権価値における変態力はその対内的因子となり、対外的因子である換金力と対をなすのである。また、手形債権価値において変態力は、受取手形が返済貨幣に姿態変換する点でその遷移的因子となり、動力的因子である換金力と対をなす。更にまた、変態力は、一般的に、ある姿態が他の姿態に変換する能力として価値の本質をなすが、手形債権価値においては、受取手形が返済貨幣に姿態変換する能力としてその本質的因子となり、形態的因子である換金力と対をなす。

手形債権価値における換金力はその実現によって変態力を実現する。他方、手形債権価値における変態力は、受取手形が返済貨幣へ姿態変換することによって、換金力の実現の成果を返済貨幣の姿態において具体化する。

こうして、手形債権価値は換金力をその対外的、動力的、形態的因子とし、変態力をその対内的、遷移的、本質的因子とするのである。

次の二節では、銅貨価値について考察する。

(12) 銅貨債務価値

金貨発行者は金貨1枚にたいして銅貨1000枚を発行し、銅貨の受取人はそれを少額取引や釣り銭の支払いに利用した後、不要になると金貨に兌換することは既に述べた。金貨発行者が銅貨発行者となり、不要銅貨所有者が金貨にたいする兌換請求者となるわけである。この銅貨は、発行者の兌換能力にたいする信用に基づいて授受される信用貨幣である。その信用は、発行者の兌換約束と継続的な金貨発行を根拠とする。

発行者にとって、銅貨は金貨での兌換を義務づけられた債務であり、その銅貨価値は発行債務価値である。それは換金力と変態力を二つの因子とする。図12では、銅貨Ccの発行債務価値における換金力はCc→Ccで表示される。この価値の換金力は受動的な金貨取得能力である。銅貨は、金貨による発行請求があって出動できるからである。

銅貨の発行債務価値における換金力は、前節で述べた手形債権価値における換金力と次の三点で異なる。前者は銅貨の発行債務における能力であり、後者は受取手形債権における能力である。また、前者は金貨だけを取得する能力であるのに対して、後者は手形の満期時に銅貨を含む返済貨幣を取得する能力である。更に、前者は受動的な金貨取得能力であるが、後者は、満期手形が支払請求に出動できる点で能動的な貨幣取得能力である。

この、銅貨の発行債務価値における換金力は、外部の金貨所有者にたいする能力であり、その価値の対外的因子となる。ま

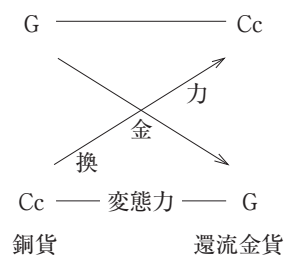


図 12

た、この換金力は、銅貨を発行請求する金貨所有者にたいして受動的にはあるが出勤する能力であり、その点で銅貨の発行債務価値の動力的因子となる。更に、それは発行銅貨に固有の能力であるために発行債務価値の形態的因子となる。

それにたいして、銅貨の発行債務価値における変態力は、図 12 では、 C_c-G で表示される。この変態力は、特殊的に、銅貨が金貨に姿態変換する能力である。それは、銅貨発行者の内部で作用する能力であるためにその価値の対内的因子となり、対外的因子である換金力と対をなす。また、この変態力は、銅貨が金貨に姿態変換する遷移的因子であり、動力的因子である換金力と対をなす。更にまた、変態力は、一般的に、ある姿態が他の姿態に変換する能力として価値の本質をなすが、銅貨の発行債務価値においては、銅貨が金貨に姿態変換する能力としてその本質的因子となり、形態的因子である換金力と対をなす。

銅貨の発行債務価値においては、換金力の実現は変態力を実現する一方、その変態力の実現は、銅貨が金貨へ姿態変換することによって、換金力の実現の成果を金貨姿態において具体化する。

こうして、銅貨の発行債務価値は換金力をその対外的、動力的、形態的因子とし、変態力をその対内的、遷移的、本質的因子とするのである。

(13) 銅貨債権価値

前節で述べた、銅貨における債務価値は発行者にとっての価値であるが、受取人にとっては銅貨の価値は如何なるものであろうか。この受取人は、銅貨を発行者から直接的に受け取る者、商品販売によって代価として受け取る者、商品購買によって釣り銭として受け取る者からなるが、いずれにしろ、銅貨は受取人にとっては金貨にたいする兌換を約束された債権であり、したがって、その価値は受取債権価値となる。この債権価値は、不要となった銅貨が金貨と兌換されることによって実現されるが、それは換金力と変態力を二つの因子とする。

図 13 では、銅貨 C_c の受取債権価値における換金力は $C_c \rightarrow G$ で表示される。この換金力は能動的な金貨取得能力である。この点は、銅貨の発行債務価値における換金力と異なる一方で、手形債権価値における換金力と同じである。前者の換金力は、発行銅貨の受動的な金貨取得能力であり、後者のそれは、満期手形の能動的な貨幣取得能力だからである。

銅貨の受取債権価値における換金力は、外部の銅貨発行者にたいして兌換請求のために出勤する能力であり、また受取銅貨に固有の能動的な能力である。その点で、この換金力は銅貨の受取債権価値の対外的因子、動力的因子、形態的因子となる。

他方、銅貨 C_c の受取債権価値における変態力は、図 13 では、

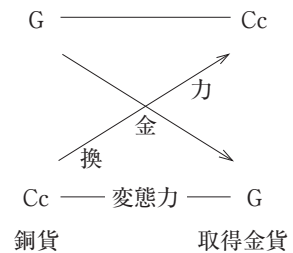


図 13

貨幣価値について

Cc—G で表示される。この変態力は、特殊的に、銅貨が金貨に姿態変換する能力であり、銅貨所有者の内部で作用する能力である。その点で、それは、銅貨の受取債権価値の対内的因子となり、対外的因子である換金力と対をなす。また、この変態力は、銅貨が金貨に姿態変換する点で受取債権価値の遷移的因子であり、動力的因子である換金力と対をなす。更にまた、それは、銅貨の受取債権価値においては、銅貨が金貨に姿態変換する能力としてその本質的因子となり、形態的因子である換金力と対をなす。

また、銅貨の受取債権価値においては、換金力の実現によって変態力が実現され、その変態力の実現によって換金力の実現の成果が金貨姿態において具体化される。

こうして、銅貨の受取債権価値は換金力をその対外的、動力的、形態的因子とし、変態力をその対内的、遷移的、本質的因子とするのである。

さて、銅貨の受取人は何時でもそれを金貨と兌換することができる。このことを基礎にして、彼は、銅貨を様々な手段として使用することが可能となる。但し、銅貨は兌換手段と兌換準備手段としては使用されない。それらは銅貨発行者における金貨だけの機能形態であるからである。また、銅貨は蓄蔵手段としては使用されない。それは、銅貨が兌換不能になる可能性がないとはいえないため、長期にわたるかもしれない保有には向いていないからである。したがって、銅貨の受取人は、それを必要に応じて、購買手段、支払手段、貸付手段、兌換準備手段を除く準備手段として、単独で、または金貨とともに使用する。

その場合、銅貨を、兌換準備手段を除く準備手段として使用することは容易である。その所有者内部での使用だからである。それにたいして、銅貨を購買手段、支払手段、貸付手段として使用することは無条件にできることではない。銅貨発行者の兌換能力を信用する者だけが銅貨を受け取るからである。その点は、支払能力を信用されて授受される振出手形や裏書手形と同じである。また、これらの手形を購買手段、支払手段、貸付手段として使用する者はその受取人にたいして債務者となるが、銅貨をそれらに使用してもその者は債務者とはならない。金貨との兌換を約束した銅貨発行者のみが債務者となるわけである。

銅貨の受取債権価値は銅貨の使い途に応じて購買手段価値、支払手段価値、貸付手段価値、兌換準備手段を除く準備手段価値となる。これらの価値については説明を省略する。基本的に、金貨におけるそれらの価値と同じだからである。ただ、銅貨における購買手段、支払手段、貸付手段の価値は不完全な能力であるのにたいして、金貨におけるそれは完全な能力である。銅貨はその発行者の兌換能力を信用されることを条件として授受されるのにたいして、金貨は無条件に授受されるからである。

こうして、銅貨価値は発行者にとっては債務価値となり、受取人にとっては債権価値となる。この両者はともに換金力と変態力を因子とする。但し、発行債務価値の換金力は受動的な金貨取得能力であり、受取債権価値のそれは能動的な金貨取得能力である。前者は銅貨の発行請求にともなう金貨の交換出動によって実現され、後者は金貨にたいする銅貨の兌換出

動によって実現されるからである。そして、銅貨は、発行から兌換までの間、受取債権価値を基礎に購買手段、支払手段、貸付手段、兌換準備手段を除く準備手段として機能するのである。

(14) 結語

私の貨幣論は、購買論、信用論、蓄蔵論からなる。前者で購買手段・購買準備手段を、中者で支払手段・支払準備手段、兌換手段・兌換準備手段、貸付手段・貸付準備手段を、後者で蓄蔵手段を規定する。これを前提にして、本稿は、行論上、購買手段、支払手段、兌換手段、貸付手段を出動手段として一纏めにし、また購買準備手段、支払準備手段、兌換準備手段、貸付準備手段を準備手段として括り、それらと蓄蔵手段を合わせて、貨幣の機能形態を三つに分類する。

出動手段は、貨幣が出動する形態のことであり、準備手段は、貨幣が出動手段として機能するまでの形態のことである。出動手段は現在の、準備手段は将来の用途のために各々その使用を制限される、不自由な貨幣である。それにたいして、蓄蔵手段は、現在も将来も使用を制限されることのない、自由な貨幣であり、蓄えることを自己目的として量的に無制限に追求される貨幣である。

この出動手段、準備手段、蓄蔵手段の貨幣価値は、各々二つの因子によって構成される。出動手段価値では、購買手段は購買力と変態力を、支払手段は弁済力と変態力を、兌換手段は兌換力と変態力を、貸付手段は貸付力と変態力を二つの因子とする。この二因子のうち、前者の各能力は、外部の相手にたいする点で対外的因子、また外部に出動する点で動力的因子、更にまた各出動手段に固有に存在する点で形態的因子である。後者の変態力は、各貨幣所有者の内部で作用する点で対内的因子、また姿態が変換する点で遷移的因子、更にまた価値の本質である点で本質的因子となる。各出動手段価値は、性格を異にするこの二つの能力を不可分の因子とするのである。

準備手段価値における二つの因子は転換力と変態力である。転換力は、準備手段が出動手段に転換する能力であり、準備手段価値の動力的因子、形態的因子である。変態力は、準備手段が出動手段に姿態変換する能力であり、遷移的因子、本質的因子である。そして、両者はともに対内的因子である。その貨幣所有者の内部で作用するからである。この点は動力的因子、形態的因子を対外的因子とする出動手段価値と異なる。

蓄蔵手段価値は展開力と変態力を二つの因子とする。展開力は、蓄蔵手段が出動手段や準備手段に展開する能力である。それは蓄蔵手段価値の動力的因子、形態的因子である。他方の変態力は、蓄蔵手段が出動手段や準備手段に姿態変換する能力である。それは遷移的因子、本質的因子である。そして、両者は、その貨幣所有者の内部で作用するために、ともに対内

貨幣価値について

的因子となる。この点は準備手段価値と同じであり、出動手段価値と異なる。

以上の現金貨幣価値にたいして、信用貨幣である手形の価値についていえば、まず、振出人にとって、約束手形も為替手形も受取人にたいする債務証券であるから、その手形価値は手形債務価値である。これらの振出手形は購買手段、支払手段、兌換手段、貸付手段として使用される。したがって、その手形債務価値は、購買手段では購買力と変態力が、支払手段では弁済力と変態力が、兌換手段では兌換力と変態力が、貸付手段では貸付力と変態力がその二つの因子となる。ただし、前者の各因子は、現金貨幣価値と異なって、受取人の与信を条件とする不完全な能力である。これらの出動手段の手形債務価値においては、購買力、弁済力、兌換力、貸付力がその対外的、動力的、形態的因子となり、変態力がその対内的、遷移的、本質的因子となる。

他方、受取人にとっては、約束手形も為替手形も、満期前であれば将来の貨幣請求権として、満期後であれば即時払いの貨幣請求権として機能するために、その手形価値は手形債権価値となる。この手形債権価値は換金力と変態力をその二つの因子とする。前者は返済貨幣取得能力であり、後者は、受取手形が返済貨幣に姿態変換する能力である。手形債権価値では、換金力はその対外的、動力的、形態的因子となり、変態力はその対内的、遷移的、本質的因子となる。

もう一つの信用貨幣は銅貨である。この銅貨は金貨発行者によって発行され、その受取人は銅貨を少額取引や釣り銭の支払いに利用し、不要になると金貨と兌換する。銅貨の価値は発行者にとっては債務価値、受取人にとっては債権価値となる。この発行債務価値と受取債権価値は、ともに換金力と変態力をその因子とし、前者をその対外的、動力的、形態的因子、後者をその対内的、遷移的、本質的因子とする。

この換金力とは金貨取得能力のことであるが、それは銅貨の発行債務価値では受動的な能力、その受取債権価値では能動的な能力となる。前者の価値の実現は銅貨の発行請求にともなう金貨の交換出動によるからであり、後者のそれは金貨にたいする銅貨の兌換出動によるからである。それにたいして、銅貨価値の変態力は、発行債務価値、受取債権価値ともに、銅貨が金貨に姿態変換する能力である。そして、発行から兌換までの間、銅貨は、受取債権価値を有する故に、購買手段、支払手段、貸付手段、兌換準備手段を除く準備手段として利用される。

最後に、現金貨幣の価値、信用貨幣である手形と銅貨の価値について表に纏めておこう。

注

- 1) 貸付手段を展開したのは、武井①②である。②によると、武井は、支払手段における「流通必要量を社会的に調節する端緒的機構」(武井②119頁)の「限界を止揚する」(同上)ものとし

貨幣		現金貨幣 (金貨)				信用貨幣 (手形)				
機能	価値	出動手段				振出手形				受取手形
		購買手段	支払手段	兌換手段	貸付手段	購買手段	支払手段	兌換手段	貸付手段	
因子	対外的動力的形態的	購買力	弁済力	兌換力	貸付力	購買力	弁済力	兌換力	貸付力	換金力
	対内的遷移の本質的	変態力				変態力				
		貨幣 商品	貨幣 満期手形	貨幣 銅貨	貨幣 貸付債権	手形 商品	手形 満期手形	手形 銅貨	手形 貸付債権	満期手形 貨幣

貨幣		現金貨幣 (金貨)				信用貨幣 (銅貨)							
機能	価値	準備手段				蓄藏手段	機能	発行銅貨	受取銅貨				
		購買	支払	兌換	貸付				換金	購買	支払	貸付	準備
因子	対内的動力的形態的	転換力				展開力	対外的動力的形態的	換金力	換金力	購買力	弁済力	貸付力	* 転換力
	対内的遷移の本質的	変態力		変態力		対内的遷移の本質的	変態力	変態力	変態力 (銅貨に兌換手段・兌換準備手段機能なし)				
		各準備手段 各出動手段		蓄藏手段 出動手段準備手段			発行銅貨 金貨	換金銅貨 金貨	購買手段 商品	支払手段 満期手形	貸付手段 貸付債権	準備手段 出動手段	

* 受取銅貨の準備手段における転換力のみ対内的因子

貨幣価値について

て貸付手段を位置付け、更にそれに続けて「G…G'という『金貸資本的形式』(同上)を展開する、としている。私は、これまで、貸付手段を貨幣論では展開してこなかったが、本稿で、貸付手段価値を考察しているうちに、貸付手段を貨幣論で展開することが理論上必要であると判断して、それを兌換準備手段に続けて規定することにした。その理由の大本は、貸付手段も資本形式論から独立に成立する貨幣の機能形態の一つであり、貨幣論における信用論で支払手段、兌換手段とともに規定されるべきであると考えたに到ったからである。しかし、私は、武井と異なって、貸付手段を支払手段における「流通必要量を社会的に調節する端緒的機構」の「限界を止揚する」ものとして、支払手段に続けて位置付けることは考えていない。貸付手段は「流通必要量を社会的に調節する端緒的機構」とは直接に関係することなく、貨幣所有者の貸付活動によって展開される機能形態であり、また、それは支払手段ではなく、兌換準備手段に続けて展開されると考えるからである。具体的には、貸付手段は購買準備手段、支払準備手段、兌換準備手段の一時的転用によって発生する貨幣の機能形態であると考えている。また、私は、武井と異なって、貸付手段に続けて「G…G'という『金貸資本的形式』」を展開することは考えていない。私見では、貸付手段の後には、貸付準備手段が続き、更にその後には蓄蔵手段が続くと考えているからである。

- 2) 流通手段については、本稿の注7)を参照されたい。
- 3) 山口重克は、「流通主体」(山口③41頁)は「必要に応じて購買が可能であるように、購買手段としての貨幣を当面の必要とは独立に準備しておく」(同上)として、「準備手段としての貨幣」(同上)を展開している。ここでは、「準備手段」は購買準備手段をその内容としているわけである。更に、山口は、「支払手段としての貨幣」(同上42頁)において「準備手段としての貨幣の機能も購買手段の準備だけでなく支払手段の準備という機能を展開する」(同上44頁)として、「準備手段」を購買準備手段のほかに支払準備手段を含む概念として使用している。本稿は山口の概念を拡大し、購買準備手段、支払準備手段のほかに兌換準備手段、貸付準備手段を含めて、準備手段という言葉をそれらの総称として使用することにする。
- 4) 蓄蔵手段については、小島④を参照されたい。
- 5) 小島⑤を参照されたい。
- 6) 小島⑤で明らかにしたように、貨幣登場前の商品価値は二つの交換力、すなわち能動的交換力と受動的交換力を有している。貨幣登場後は、全ての商品は、貨幣にたいしてのみ交換を求める故に、受動的な交換、すなわち販売の形を余儀なくされる。そのために、貨幣登場後の商品価値においては、交換力は受動的交換力に特化され、販売力となる。それにたいして、貨幣の購買手段価値においては、交換力は能動的交換力に特化され、購買力となる。以上は、貨幣登場前の商品価値における二つの交換力、貨幣価値における購買力、貨幣登場後の商品価値における販売力についての小島⑤での説明である。ここで更に、小島⑤で明らかにした商品価値について述べておこう。商品価値は二つの因子からなる。貨幣登場前の商品価値は、交換力を形態的因子、変態力を本質的因子として構成される。後者の変態力は、商品が他の商品に姿態変換する能力であり、前者の交換力と対をなす。また、貨幣登場後の商品価値は、販売力を形態的因子、変態力を本質的因子として構成される。後者の変態力は、商品が貨幣に姿態変換する能力であり、前者の販売力と対をなす。変態力は、一般的には、ある姿態が他の姿態に変換する能力として価値の本質をなすが、各々の価値においては本質的因子として存在するわけである。

- 7) ここで、流通手段としての貨幣について触れておこう。私見では、この流通手段は、一流通主体Aにおいて、自商品の販売Wa—Gによって取得され、他商品の購買G—Wbによって出動する貨幣Gと定義される。この貨幣は、販売Wa—Gが購買G—Wbを制約する関係を形成する機能を果たす。以上は小島⑥で述べたことであるが、ここで更に以下のことを付け加えておこう。流通主体Aにおいては、商品Waの販売によって取得された貨幣が商品Wbの購買に出動するのであるから、貨幣価値としては特に購買手段価値以外の価値が存在するわけではない。また、流通手段を流通主体ではなく貨幣にそくして見るならば、流通手段としての貨幣は前段で商品Waの価値を実現し、続いて後段で商品Wbの価値を実現している。それは主体を替えて購買に連続的に出動する貨幣である。つまり、流通手段を貨幣にそくして規定すれば、それは、連続的に機能する購買手段ということになる。したがって、ここでも、流通手段には、購買手段としての貨幣価値以外の、それに固有の価値は存在しない。本論で、特に、流通手段としての貨幣の価値に触れなかった所以である。現在の私は、流通手段を、販売によって取得され購買に出動する貨幣として購買手段論で取り扱うことにしている。
- 8) 後に述べることであるが、支払手段は、満期手形債務のほかに、貸付手段の出動によって生ずる貨幣貸付の満期債務にたいしてもその履行のために出動する。
- 9) 貸付手段は貨幣に固有の形態ではない。物もその形態をとることがある。土地、建物、車、衣類、米麦の種粉等の有形物、また名義、資格等の無形物も貸付手段として機能する。これらの貸借が有償であれば、貸し手は借り手から期間使用料を受けとる。この期間使用料は貸付手段としての物の期間使用にたいする報酬であり、この期間使用は商品である。したがって、物についての貸付手段は商品論で規定されることになる。この場合、この期間使用という商品の価値は、他の商品と同様に欲しい商品によって表現され、それと期間使用の交換（物の貸付）によって実現される。貨幣が登場すると、それは期間使用にたいする代価によって表現され、期間使用の販売（物の貸付）によって実現される。
- 10) 因みに、貸付手段としての貨幣が、購買準備手段、支払準備手段、兌換準備手段の一時的転用ではなく、蓄蔵手段としての貨幣を源泉として自己増殖のために継続的に投下され、元利を回収されるならば、貸金業資本が発生する。この蓄蔵手段としての貨幣とは、蓄えることを自己目的とし、その量を無制限に追求される自由な貨幣である。その貨幣が、失敗の危険覚悟の下、質的には自由な貨幣であることを、量的には最低投下額の充足を条件として、貨幣増殖を目的に貸付手段として継続的に投下され元利回収に成功することによって、貸金業資本が生まれるわけである。
- 11) 手形に裏書きした場合には、裏書為替手形、裏書約束手形が発生する。裏書人にとって、これらは債務証書である。これらの裏書手形も、本文で述べた振出手形と同様に、購買手段、支払手段、兌換手段、貸付手段として機能するが、その機能は被裏書人の与信を条件とする。また、裏書手形の債務価値は、本文で述べた振出手形のそれと同様に、購買手段価値、支払手段価値、兌換手段価値、貸付手段価値として存在するのであり、それらの価値は、各々、購買力、弁済力、兌換力、貸付力を対外的因子、動力的因子、形態的因子とし、変態力を対内的因子、遷移的因子、本質的因子とするのである。

参考・引用文献

- ①武井邦夫 「貨幣の資本への転化 (1) ——『資本の一般的形式』を中心に——」『茨城大学政経

貨幣価値について

学会雑誌』第17・18合併号 1966年3月

- ②武井邦夫 「貸付手段論」鈴木鴻一郎編『マルクス経済学の研究 上』東京大学出版会 1968年9月
- ③山口重克 『経済原論講義』東京大学出版会 1985年12月
- ④小島 寛 「世界貨幣と蓄蔵貨幣」『東京経学会誌』第135号 1984年3月
- ⑤小島 寛 「商品価値について」『東京経学会誌』第277号 2013年2月
- ⑥小島 寛 「流通手段」『経済学年誌』第14号 法政大学大学院 1977年3月